

河内国守護畠山氏の領国支配と都市

—— 畠山政長・義就期を中心に ——

小 谷 利 明

はじめに

本稿の課題は、河内国守護畠山氏の領国支配を守護所との関係で論じることにある。この課題については、畿内守護研究の第一人者である今谷明氏の業績がすでにある。今谷氏は中世都市の研究に地方政治都市の発想がなかったことを批判するとともに、守護所が守護制度の地理的・空間的な反映であるとし、守護所研究の重要性を指摘されている^①。つまり、守護所研究は、守護権力を考える上で、その権力構造が集中して現われる分野であることから、守護権力の実証作業の進展とともに、新たな守護所像を構築する必要がある^②。

今谷氏の河内における守護所研究を見ると、次のような特徴がある^③。

- 1、守護の領国支配は、守護―守護代―小守護代―郡代と文書が遵行されていく重層的な支配構造を持つ。元々守護は在京しており、京都に近い河内では守護代も在京していた。このため、在国して領国を支配するのは、小守護代・郡代であった。
- 2、畠山氏は領国内の国人層を重用しないことを特徴とする。
- 3、半国守護体制の時期があり、このため守護所が分立した。

4、守護所の立地を交通関係から捉え、特に大和への交通に注意を払う。具体的には大和国人勢力との関係である。これは、畠山氏が大和国人を被官化していくのに伴い、大和における興福寺大乘院方と一条院方の抗争の影響を畠山氏が多大に受けたこと。この要因が両畠山氏の抗争に発展し、応仁の乱を引き起こす原因とみられる。

5、以上を土台にしなが、今谷氏は守護所の変遷を通覧する方法を取った。

1 は、守護文書論と関係する。文書がどのように遵行されるかを見ることは、守護内衆の職名を発見する方法としては大きな収穫があった。しかし、文書を手に入れる側では、どのような働きかけをしたのかなど、具体的に文書の機能論まで展開する方法ではなかった。これについては、矢田俊文氏が文書をどのように手に入れるかを検討され、文書の受益者主義と公権力の実在について論証されている³。ここでは、矢田氏の議論を受けて、文書を受ける場については検討する。その場所がいったいどのように機能しているかを問題としたい。

2 は、畠山氏が河内に入国してからどのように国人を家臣団編成していったかを考察していかないことである。これは、畠山氏が領国支配をするためには、前代の国府・守護所・国衙領の掌握など段階的に行わねばならない問題があったと思われる。畠山氏の奉行人が河内南部に多いこと。これは守護所周辺の掌握と深い関わりがあるだろう。このため、守護所の位置があらためて問題となる。これは、3とも関わるし、4とも関係する。4が大和国人層への過大評価と見るならば、2の河内国人への評価は過小評価に見える。この点、河内国人について川岡勉氏が端的にまとめており、河内国人の評価も再考される必要がある⁴。また、5についても、義就の守護所を高屋城ではなく、誉田であるとした中田佳子氏の研究があり、守護所の変遷自体も再考する余地がある⁵。

ここでは、以上の問題を踏まえ、今谷氏が議論された守護所の変遷をあらためて位置付け直しなが、上述した問題を論じて行く方法を取りたい。なお、検討する時期については、畠山政長・義就期までと限定しておく。

一、南北朝内乱に伴う守護所の移動 丹南から古市へ

河内の地方都市を考えるための素材は、中世前期ではほとんどない。地方都市としてまづ上げられる国府・府中も、実態がつかめない。地名から見て、河内国府の場所は藤井寺市国府にあつたと考えられ、長尾街道と東高野街道が交わる地点であり、付近には総社があるなどが指摘できる程度である。

河内の守護所の所在がわかるのは、鎌倉時代最末期である。国府の南西に位置する丹南にあつた。丹南は、竹内街道と中高野街道が交わるやはり交通の要衝である。河内国は細長い地形である。国府と守護所の場所が原則的に別であるとされるが、ふたつの主要拠点は比較的接近しており、南河内地域の北部にあつたことになる。これより北の地域、具体的には現在の八尾市から東大阪市・大東市・寝屋川市・守口市・門真市域及び枚方市の一部は、大和川や淀川の流路となる湿地体であり、南河内地域と全く地域が異なっている。河内の大きく分けてふたつの地域のうち、中世前期国府・守護所の機能が南河内にあつたことは注意すべきことである。

鎌倉時代、河内守護は北条氏の赤橋流に相伝され、この時期守護代は内藤氏であつた。⁽⁷⁾ 河内の守護所は、「楠木合戦注文」の正慶二年（元弘三年・一三三三年）正月十四日の合戦の記事によると、河内国内で戦われた楠木氏と幕府方の合戦で、楠木氏により幕府方が追い落とされた人々の名が上げられている。それには「河内守護代 在所丹南」と記されている。また、ここで守護代とともに追い落とされた河内国の人物として「丹下、池尻、花田地頭俣野」の名もある。

丹南は、河内国丹南郡丹南を指す。丹下は、羽曳野市恵我之荘周辺の地域を指す。羽曳野市と松原市の堺にある大塚山古墳の東に位置し、南北朝期にたびたび登場する丹下城は、この古墳を活用したといわれる。⁽⁸⁾ 守護所丹南の北東に位置し、距離は二キロもない。池尻は大阪狭山市池尻に位置し、発掘調査で南北朝期の城跡が発掘されてい

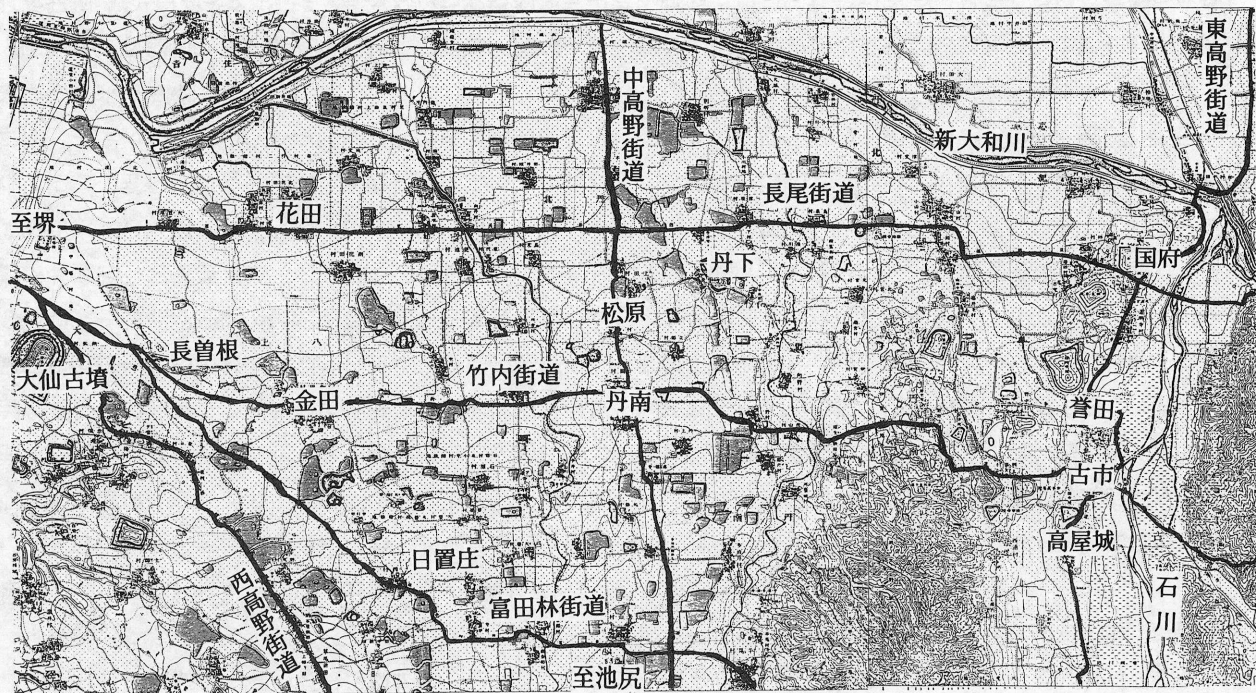


図1 丹南周辺地図（明治22年陸地測量部2万分の1図より縮小）

る。丹南から南に四キロ強の場所である。花田は堺市南花田町一帯の地で、八上郡に属する。丹南から北西に約二キロ強の場所である。

これらは何れも丹南に近接し、守護代の武力として機能していた。鎌倉時代河内守護所である丹南は、周辺の領主を軍事動員する機能を持っていたことが理解できる。

次に南北朝期に入ると、守護所は古市に移る。丹南から古市に移動した理由や時期については、やはり軍事的な側面が強いと思われる。

楠木正成が戦死した後、古市と丹下の間で南北両軍が数度の戦闘を行っている。つまり、延元二年（建武四年・一三三七）三月には、南朝方は古市に要害を構え、北朝方の丹下三郎入道西念以下が大軍を率いて来襲し、野中寺前で合戦し、丹下らは丹下城に引き返している。⁽⁹⁾ また、その直後、北朝方の細川頼氏⁽¹⁰⁾が古市に寄せ、野中寺東、藤井寺西、岡村北面などで合戦。また、同年十月には南朝方が丹下城を攻めている。⁽¹¹⁾ 翌年三月も南朝方が丹下城を攻め、閏七月には、丹下が松原庄に城郭を構え、合戦に及んでいる。この時、丹下八郎太郎子息能登房が討ち取られている。⁽¹²⁾

この時期の城郭では、このほか八尾城や池尻城などの存在も重要であるが、南北両軍が対峙したもつとも緊張した場所は、古市と丹下城であった。

その後、貞和四年（正平三年・一三四八）十一月に河内国弓削庄の乱妨を訴えた法隆寺の記録に、河内国守護高師泰の守護所が古市にあり、そこで交渉したことがわかっている。⁽¹³⁾ この時期の古市について、中田佳子氏は、文安三年（一四四六）七月に西琳寺住持高算が記した「西琳寺流記」の記事から、延文五年（正平十五年・一三六〇）に古市の南の高屋に北朝方が「山陣」を構ったこと、それ以前の貞和四年（正平三年・一三四八）にも高屋が北朝方の発向のため、寺院の被害があったことを上げられている。⁽¹⁴⁾ また、これと対比する形で南朝方の僧雲祥が筆写し

た奈良県川上村運川寺の大般若經奥書から、正平一五年（延文五年・一三六〇）に楠木方が古市に発向していることを注目された。^⑮

古市・丹下間で激しく戦闘が行われてから、十年後、古市は北朝方の拠点となり、これをめぐって合戦が行われていたことが理解できる。

二、丹南と周辺の諸勢力

従来、丹南という地域が注目されてきたのは、この地域が河内鑄物師の本拠地の一部である点であった。阪和自動車道建設に伴う発掘調査で丹南・真福寺・日置庄遺跡などから鑄物師に関する出土遺物や遺構が検出されている。^⑯

河内鑄物師については、網野善彦氏の詳細な研究がある。^⑰ここでは小稿と関わる鎌倉期以降について見ておくことにする。

河内鑄物師は、全国的な販路を持った有力な集団で、藏人所燈炉以下鉄器物供御人であった。鎌倉時代中期段階で河内鑄物師はふたつの集団があったと考えられている。右手燈炉作手と左手燈炉作手である。右手作手は、日置庄を中心に河内国金田・長曾禰などを本拠とする丹治姓の鑄物師である。一方、左手作手は廻船鑄物師系の集団で、鎌倉時代中期には堺周辺の地域を新たな根拠としていったと言われる。番頭は嘉禎二年（一二三六）段階の姓を上げると、草部姓八名、布忍姓三名、氷姓三名、広階姓二名、紀姓・山河姓・橘姓・膳姓各一名である。これらの姓を見ると、布忍氏など丹北郡に本拠を持つものや草部など和泉国側に本拠があったものなど広範な勢力であったことが想像できる。彼らがこの時期堺に本拠を持つのは、このためだろうか。この内、最も人数の多いのが草部姓で、東大寺鑄物師惣官である草部氏が最も有力者であった。後には、東大寺鑄物師惣官職は、中原氏に奪われているが、

網野氏は鑄物師の全国支配の動搖とこの問題を関連づけて説明されている。その動搖とは、各地の守護と地方の鑄物師が結びついたことなどが想定されている。

ところが、南北朝以前、本拠の河内でも丹南に守護所が置かれたことを見ると、守護と鑄物師の結びつきについて同様の事態を想定する必要があるのではないか。網野氏は鑄物師を武士的な存在とも見ている。

もうひとつ問題となるのが、守護畠山氏の有力な内衆に草部氏がいることである。左手作手の中心的存在であった草部氏と同族かどうか不明であるが、この点についても検討しておこう。

川岡勉氏は、畠山氏の河内支配の状況について「基国（畠山：筆者注）のもとで河内守護代として活躍していたのは、遊佐河内守国長（長護）である。『明德記』によれば、明德二年（元中八・一三九一）に山名氏清の乱が起ったとき、国長は河内の十七箇所（大阪市から寝屋川市にかけて広がる幕府御料所）に城郭を構えて、和泉・紀伊の軍勢の通行を妨害したという。彼自身は基国とともに在京することが多く、現地には小守護代を置いていたようであり、草部左衛門次郎入道・同主計允・菱木掃部助盛阿らが国長の命に従って河内で活躍している。」とされる。⁽¹⁸⁾

畠山基国が河内守護となった永徳二年（一三八二）は、南北朝末期の時期で、楠木正儀が再び南朝に復帰したための処置であった。畠山氏が河内に入国した初期段階で最も顕著な活動をするのは、草部・菱木氏である。草部は北河内の小守護代であり、菱木は南河内の小守護代であった。後、彼らは奉行人として活躍する。⁽¹⁹⁾草部・菱木氏は共に本来和泉国出身であったと考えられる。菱木・草部は現在の堺市、和泉国大鳳郡にあり、南北に接した地域である。

彼らと畠山氏の結びつきについて、和泉国守護であった畠山国清時代に両者が結びついたと考えられている。一方、河内国と接する和泉国人としては、草部のすぐ北に位置する毛穴氏が有名である。毛穴氏は、和泉国に本拠を

残しながら度々畠山氏方と軍事行動を共にしている。⁽²⁰⁾ 菱木の東に位置する和田氏も、河内鑄物師の本拠である金田・長曾禰の領有を主張するなど、これらの地域の武士と河内は深い関わりがあった。⁽²¹⁾

左手作手が堺周辺を中心に活動するようになることを考えると、鑄物師の草部氏と守護畠山内衆の草部氏の本拠が同じであった可能性は否定できないと思われる。

次に、鎌倉末から守護代に率いられ、活躍した丹下氏も注目されるべき存在である。前述した「楠木合戦注文」に守護方として活動する丹下、それに「花田地頭俣野」と出てくる地名「花田」出身の国人と考えられる花田氏も畠山氏の奉行人となる。上述したことを加えると、畠山氏の奉行人の多くが南河内から和泉国にかけての地域の国人であったことがわかる。和泉国人である菱木が南河内の小守護代であったことは述べたが、草部氏も後に南河内の軍事指揮権を持つ存在となる。⁽²²⁾ これら南河内に本拠を持つ守護内衆が畠山氏の官僚層になったのである。

特に、丹下は南北朝期には、河内の北朝方の拠点となり、南朝方の軍忠状に度々丹下の実名が上がるなど、この時期の河内国人の中心であったことが窺えるのである。丹下は後に、政長系畠山氏の筆頭奉行人となり、守護家を代表する存在として中世を終えるのである。⁽²³⁾

このため、畠山氏守護就任以前の河内国人の状況は、大きな意味を持つてくる。特に守護所とそれを取り巻く武力、及び官僚としての資質が、すでに南河内の国人に備わっていたことは注意すべき問題である。どこに守護所を置き、周辺の国人を被官化するかは、守護にとって大きな課題であったと思われる。

三、畠山氏の守護所と地域支配 若江と古市

畠山氏時代の河内の守護所がどこにあったかがわかるのは、応仁の乱の直前である長祿四年（一四六〇）である。畠山基国が河内に入国したのが永徳二年（一三八二）であるから、その間は守護所がどこにあったかは不明である。

『経覧私要鈔』長祿四年九月二十三日条に、京都を追放された畠山義就が若江城に入ったことや、この後、義就は龍田合戦で敗北し、若江城は畠山政長の守護代遊佐長直が入るなど、この時期、若江が守護所であることは、明白である。但し、なぜ若江に守護所が置かれたのか、その理由を考える必要があるう。

ここでは、畠山氏の権力基盤である守護所と地域支配の関係を分析する方法として、受給者が守護畠山氏と文書発給について交渉する場を検討したい。次の文書は、観心寺が畠山政長判物を手に入れるため、掛かった経費を書き上げた記録である。

御判取時入目

三貫文	御屋形様	五貫文	遊佐殿
一貫文	スタノ与左衛門殿	一貫文	布瀬殿
一貫五百文	恩智孫四郎方	五百文	御屋形様之中間
五百文	遊佐殿中間	二百文	孫四郎方中間
百文	同中間	百文	六郎二郎
百文	布瀬殿中間	二百廿五文	京ニテカワシノ利分代
三百八十五文	年預承仕 上下セキ銭	廿文	堺ニテ南条中間 飯酒
廿五文	住吉ニテ同中間 二人吉酒一升	六十文	孫四郎方中間 飯酒二度二下
一貫文	堺ニテカワシ銭 夫チン	三百文	住吉ニテ取代

一貫九百五十文	年預京上	百文	恩智殿 <small>（つゝ）</small> 捶代
三百五十文	雜用十三日		
三百五十文	同酒一斗四升代	八十文	南条殿 <small>（つゝ）</small> 捶代
三百十五文	同酒一斗二升二合代	三百卅二文	両所 <small>（素題）</small> サクメン
	同酒一斗二升二合代		女膳代
八十文	同アハセ柿数五百廿	廿文	同コフ代
廿五文	マツサキ方タル代	百文	同酒四升代
五文	□ケコツクリ二十分	三百文	同時使者下
五十文	京重而古市江下時	四十八文	同豆布六代
	コミ酒二升代		
三百文	松サキ方	三百文	恩智殿中間
廿四文	南条方中間	二百文	同衛門下
	古市ニテ飯酒		
六百文	年預古市若江		
	ツムル四日 <small>（下）</small>		

この文書は、冒頭に「御判取時入目」とあり、観心寺が「御屋形様」から判物を得るために使った費用の「覚」（以下、この史料を「覚」と注記する）である。名前を拾ってみると、「御屋形様」「遊佐殿」「スタノ与左衛門殿」「布瀬殿」「恩智孫四郎方」「六郎二郎」「南条殿」「松サキ方」（南条か）衛門」などの名前があり、彼らの中間も加わる。

遊佐以下の人名から見て、これらが河内守護畠山氏の内衆であることは、容易に判断がつく。『観心寺文書』に

は、守護畠山氏の判物の発給例が比較的多く見ることができ、遊佐・南条・恩智らが守護畠山氏の判物を遵行した例は文明三年九月二十七日付で発給された畠山政長判物のみである。⁽²⁵⁾

このため、この「覚」は文明三年九月二十七日付畠山政長判物を手に入れる際に掛かった費用の「覚」と見られる。まず、人名から確認すると、「御屋形様」は、すでに述べた畠山政長である。「遊佐殿」以下は、判物を遵行した関係から人名を追っていくと、「遊佐殿」とは河内守護代遊佐長直を指し、「南条」は南条大郎左衛門尉盛正で、「恩智孫四郎」は恩智孫四郎貞成となる。⁽²⁶⁾「スタノ与左衛門」以下は、これら遵行文書と直接関わらない。このため、比定は困難である。想像としては、「スタノ与左衛門」は紀州隅田氏一族と思われるが詳細は不明。「布瀬殿」は、大和国国人の布施氏であろうか。『大乘院寺社雜事記』文明三年閏八月六日条に「布施今朝七時分陣払、河内エ引退了、希有次第也、古市以下帰陣了、」とある。これ以前布施氏は大和で越智方の万歳を攻撃するなど軍事展開していたが、この日河内に帰っている。この「覚」が作られた時期の政長方の布施(瀬)氏では、彼が最も目立つた行動をしている。

文明三年七月までの時期は、政長方の若江・菅田両城と義就方の三箇城などで大規模な戦闘が行われていた。だが、概ね政長方が河内を掌握していた。この文書を観心寺が手に入れる動機は明らかにできないが、政長方の河内支配が磐石となった時期に判物を得たと考えられる。

この「覚」から、次のことがわかる。政長の判物を手に入れるためには、観心寺は多数の守護内衆と交渉する必要がある、それに応じて銭が必要であったこと。文書を手に入れるために観心寺は各地に行つて活動したことである。以上から、観心寺が出向いた場所を検討することで、河内守護畠山政長の地域支配の拠点を見出すことになるだろう。

判物を手に入れるために観心寺方が行動した場所は、若江・古市・京・堺・住吉であった。ここで観心寺は、京

・堺・住吉など河内以外の都市に行く必要があったことがわかる。京は政長自身がいることから、堺・住吉が具体的に説明する必要が生じる。これらの都市に行く必要が生じたのは、「寛」から為替による錢の調達などの要因が考えられる。文書を手に入れるためにはこれらの都市に赴き、錢を得なければならなかった。堺とともに住吉が入っているのは、現在と違って、大和川付替え以前の堺と住吉は、密接な地域であるためであろう。また、堺・住吉で南条方中間に飯酒を出していることから、これらの都市にも守護内衆の被官が行動を共にしていることがわかる。このことは、単に為替による錢の調達のみの問題を限定することができるのか判断に迷う。ここでは、判物を得るためには、堺・住吉などの都市の存在が必要であったことを確認しておきたい。（これら、河内国以外の都市の問題は後述する。）

次に、観心寺年預の滞在先をみると、京・若江・古市であった。観心寺年預は、判物を得るための交渉を行ったとみられるから、彼らが赴いた場所が文書を得るための交渉場所であったと考えられる。交渉場所が、京・若江であったことは容易に理解できる。前述したように京には畠山政長自身があり、在京奉行人などもいた。若江は河内の守護所であり、これら二つの都市が交渉場所になることには問題がない。

では、古市をどう理解すべきであろうか。古市については、前述したように南北朝期には河内守護高師泰の守護所があった。しかし、古市は、若江に守護所の地位を奪われたと考えられており、この応仁・文明の乱の時期、何ら脚光を浴びていなかった。古市が再び問題となるのは、畠山義就が河内に下国する文明九年九月以降のことである。

しかし、この「寛」から古市は若江と並び、守護権力と交渉を行う場であった。このことは、古市が畠山氏の地域支配の拠点であったことを意味する。そして、これらの政治交渉に重要な役割を果たした人物は、恩智・南条両氏であった。今谷明氏は、この時期の南条・恩智氏の発給文書から「南条盛正も、かつて南条氏が錦部郡代であっ

たらしいことから推して恐らく郡代と認められる。したがって恩智貞成か道春のうちいずれかは小守護代であろう。」とされ、南条・恩智氏が錦部郡支配と深くかわるものと考えられている。恩智・南条両氏は南河内支配を行う畠山氏内衆と位置付けられるのである。彼らの活動拠点は、古市にあったのではないか。

古市について、もう少し関連史料を検討したい。

「河内ふるいちおんち殿」

公方様参候御紙二荷六十束分候、堺北庄役所へ、早々可被付送之由、被仰出候、定而自京都被仰下候哉、恐々謹言

南都雜掌

九月十二日

重芸（花押）

恩智四郎左衛門入道殿

御宿所⁽²⁸⁾

この文書は、南都雜掌重芸が、恩智四郎左衛門入道に充てて出した文書である。南都雜掌は、京都にあつて興福寺と京都政界を仲介する役である。恩智四郎左衛門入道は、『大日本古文書 観心寺文書』五六八号・五六九号や、『大日本古文書 金剛寺文書』二二一号から恩智道春と確認される。彼は前述の恩智貞成の文書を遵行する人物である。内容は、興福寺が將軍へ贈る紙を堺北庄役所から京へ輸送することについて恩智氏に依頼したものである。『大乘院寺社雜事記』文明六年三月十三日条に「河内恩智入道方より、雜紙請取到来了」とか、文明七年九月十三日条に「紙五十束内不足之由、恩智入道申之、糺明之由仰遣立野方了」とあり、恩智道春が興福寺と紙のやり取りを行っていたことが散見できる。先の文書に戻ると、恩智道春の居所は、文書の端裏から「ふるいち」にいたことがわかる。

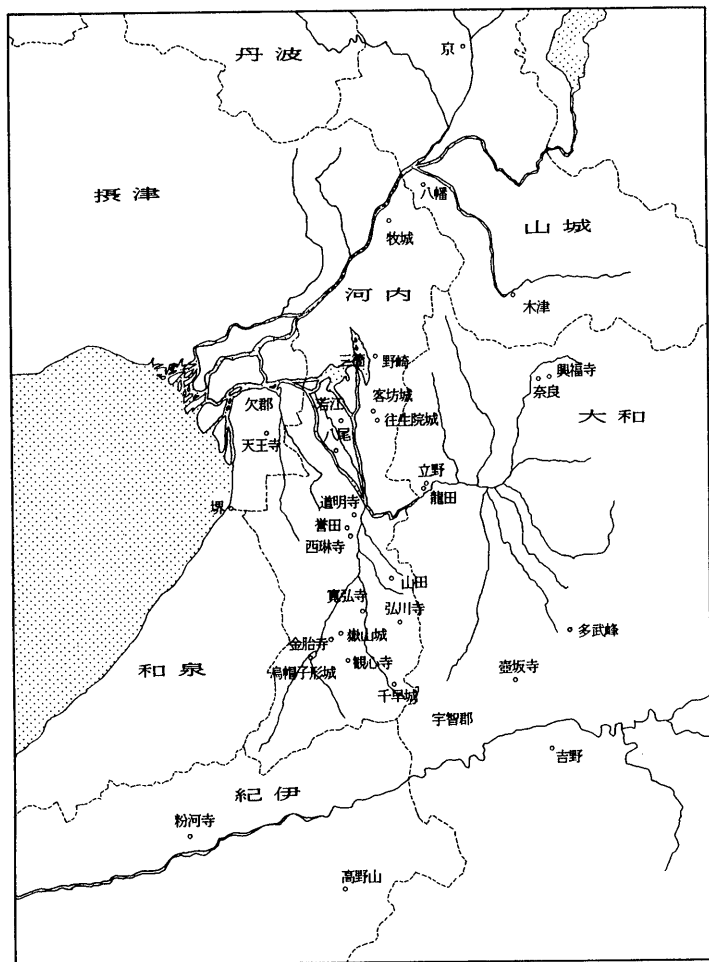


図2 応仁・文明の乱の頃の河内周辺要図（『羽曳野市史』第一巻より）

以上の結果から、恩智や南条が普段いる場所は古市と考えるべきである。従来、小守護代・郡代などがどこに居住していたか議論にならなかった。ここで、古市がそのひとつと考えることが可能となったのである。

次に、古市と軍事拠点との関係を見ておきたい。政長方が、城郭施設として使用していた城を見ることで、政長の家臣団編成が位置付けられる。

文明九年九月に義就が河内下国した時の状況から政長の城を推測すると、若江城・誉田城・往生院城・客坊城・嶽山城などである。^⑩往生院城以下は山岳地帯であり、若江・誉田が平野部の城と言える。若江は、守護代遊佐長直が立て籠もった守護所であり、最も重要な城であるが、誉田城も「昨日夕誉田城責落之、大将和田美作守、同五郎伯父福恩寺自害、恩智タンケ没落云々、宇治郡杉野、宇野、坂部、野原同自害云々、二百余人没落、三十余人自害了」とあり、多くの武将が詰めていた。^⑪城郭としては若江・誉田両城が政長方にとつて最も重要な城であつた見て良いだろう。

守護所で守護代の居城となり、河内の城郭の中心である若江城がある一方、先の「覚」で重要な働きをする恩智氏や鎌倉末・南北朝期から南河内で活躍する丹下氏も誉田城に籠つたのである。またこのなかには、大和国宇治郡軍勢も籠つていたことがわかる。恐らく、古市は政務をする建物と内衆の居所があり、戦時にはこれらの勢力は誉田城に籠るようになっていたと考えられる。

小 活

前節から、古市は若江と並ぶ畠山氏の領国支配の拠点であつたことが実証された。それでは、鎌倉以来の守護所の変遷から、二つの拠点の問題をまとめておきたい。

まず、河内の守護所は、鎌倉時代丹南にあり、南北朝期に古市に移った。この時期の守護権力は、これら守護所

周辺の国人を軍事編成し、一つのまとまった単位となっていた。その中心は、丹下氏とみられる。また、南河内の国人層の多くは、畠山氏奉行人など官僚層となっている。つまり、畠山氏は南河内の国人を掌握し、その後、若江に展開したと考えられる。古市が一貫して守護所の機能を持っていたことは実証できないが、政長の河内国支配段階では、ふたつの守護所が存在していたと考えてよいだろう。

それでは、若江に守護所が置かれた意義は、どこにあるのであろうか。若江城は、河内のなかでも、発掘調査が進んでいる地域のひとつである。若江遺跡の発掘から、若江城が築城される以前から当地には、若江寺が存在していたことがわかっている。この寺院は、文献的には九世紀後半から存在がわかり、中世では平等院の末寺であったことがわかる。出土した瓦は、飛鳥時代末期のものから確認でき、出土量の多いのは平安時代後期から室町時代までとされる⁽³⁴⁾。この周辺は、皇室領大江御厨、同若江御稻田、摂関家領玉櫛庄、中御門家領稻葉庄、醍醐寺領若江庄、興福寺領若江庄、高野山領新開庄、石清水八幡宮領神並庄、小野宮家領辛島庄（牧）など、狭い範囲に数多くの荘園が集中している地域である。これらの地域は、弥生時代以来の農耕地であり、中世から商品作物を生産する地域であった。河内においても最も生産力の高い地域と考えられる。

福永信雄氏は、若江寺はこの地域の中心であり、水運の中心であったと指摘されている。守護所若江は、権門の利害が集中し、また摂関家の河内支配の拠点であった若江寺と近接する場所に置かれたのである。これは、畠山氏の河内支配に取って画期的なことであつただろう。

『長祿寛正記』の類本である「長祿記」⁽³⁵⁾に文明十四年の年記と若江寺右筆祐全の署名があることを考えると、若江寺は、この時期も機能しており、守護畠山氏とも深い関わりを持つ寺院となっていたことがわかる。畠山氏は、若江に守護所を置くことで、権門の力の強いこれら中河内地域の支配を強化したのであろう。この地域周辺の権力として後に安見宗房と権力を二分した萱振一族がいる⁽³⁶⁾。萱振氏が守護代遊佐氏の内者として登場することから、中

河内地域の国人を軍事編成したのは守護代遊佐氏であつたのかもしれない。若江を支配することは、河内の最も豊かな地域の流通の拠点を押さえたことを意味する。畠山氏の河内支配にとつて若江を守護所にすることは、大きな意味があつたのである。

四、畠山義就の河内下向 守護所菅田と周辺都市

文明九年九月、畠山義就が河内に下国し、直接河内支配に乗り出した。これは、その後の河内の歴史を考える上で画期となる事件といえる。義就は、下国後の文明十一年（一四七九）に新造屋形を作る⁽³⁷⁾。これを高屋城とみる今谷明氏⁽³⁸⁾と菅田屋形とみる中田佳子氏⁽³⁹⁾とに見解がわかれている。中田氏が丹念に上げられた史料などから義就の新造屋形を菅田と考えてよいと思われる。中田氏は、築城初期の高屋城を菅田城の詰め城と規定された。ここでは、中田氏の説に従う。但し、築城時期について中田氏が言われるように基家の時期であるかどうかは判断がつかない。

ここでは、義就の領国経営の本拠が菅田になつた意味を考えたい。

まず菅田は、義就の内衆で軍事的にも活躍した菅田氏の本拠であること。古市にも近く、南河内を基盤に領国経営をするのに適していたことなどが、まづ上げられる。

また、守護代遊佐は本城若江城を棄て、義就と行動を共にしたことも注意される。これは、これ以後、遊佐が若江城で活動した記録が畠山氏滅亡まで全くみられなくなることから導き出せる。守護と守護代が別の都市を本拠とし、それによつて一国の権力構造が規定された越後などの例を見ると、河内が守護と守護代が同居する体制となつたことは、河内国の守護・守護代体制の有り方を規定したと考えられる⁽⁴⁰⁾。

守護家である畠山氏の河内居住は、有力な内衆たちを菅田付近に集住させた可能性がある。また、文亀元年（一五〇一）には守護奉行所・守護代奉行所が存在していたことが確認されており、この地域に新たな行政機構が再編

されている。菅田の規模は従来の守護畠山氏の守護所を超えた都市であった可能性がある。

守護所菅田の状況について、畠山義就と親交が深かった堺の海会寺の僧季弘大叔の活動を通じて菅田と周辺都市の状況を見て行くことにする。

堺の海会寺住職季弘大叔の日記『蔗軒日録』は、文明十六年（一四八四）四月から文明十八年十二月までの記録が残されている。泉澄一氏は、『蔗軒日録』の交通・通信関係の記事を四地域に分類されている。⁴²つまり、瀬戸内海方面（周防山口、備前岡山）、京都方面（東福寺）、河内方面（河内国守護畠山氏とその家臣、および畠山氏の菩提寺）、伊勢方面（伊勢参宮など）とする。ここで、大叔が大内政弘や畠山義就など西軍の武将と交渉を持っていたことがわかる。

わずかな時期の記録であるが、特に記事が頻出するのは畠山義就とその家臣についてである。この間、大叔は何度となく義就の屋形を訪れている。大叔の日常で権力者に対し祈禱を行っているのは義就に対してであり、亡くなった義就の息子修羅法師へ月忌の祈禱も繰り返されている。また、年始の礼も義就及びその内衆のみである。権門間の儀礼及びその関係が最も現われる「年始の祝儀」において海会寺は畠山氏とだけ関係を持っている。⁴³この時期、堺の海会寺は義就の祈禱寺のひとつとして機能していた。

内衆との付き合いでは、菅田正康と神保与三右衛門尉との関係記事が多い。『蔗軒日録』文明十七年八月十四日条を見ると、義就の内衆の神保与三右衛門尉が住吉浦を領する記事があり、大叔が喜んでいる。また、その翌日の記事では、堺会合衆十名が和泉の乱の鎮圧を義就の内衆菅田正康に依頼している。

文明十七年十二月には有名な山城国一揆が起こった時であり、この時期、義就と政長の両畠山は数年に及ぶ対陣時期に当たる。大叔と義就との関係は決して個人的なものではなく、堺会合衆も畠山義就の影響下にあったと考えられる。堺は明確に義就方として活動していたのである。

堺が義就の影響下に入つたのは、いつであらうか。文明九年九月、義就は河内下国に際し、天王寺を落とし、和泉守護が大敗している。⁽⁴⁴⁾ 義就は、河内・大和をはじめ、摂津欠郡や堺など広い範囲に影響を持った可能性がある。

また、文明十四年三月、細川政元・畠山政長は、実力で河内を占拠している義就を撃つため、軍を進める。この時、畠山義就と細川政元は単独講和をする。その時の条件が、義就の摂津欠郡の返付であり、政元は河内十七ヶ所の返付であつた。⁽⁴⁵⁾ この後も畠山政長と同義就の対決は、広範な地域で行われており、義就と政元の和議の条件がそのまま履行されたと見るべきではないだろう。義就と堺との関係は、義就の河内下国以来のものと思われる。

別の史料からこの問題を改めて考えたい。

(端裏書)

「石見上座算用状」

就御奉加河州江御使下入足 文明十九年丁未二月廿六日

一、誉田殿礼 四百文 扇二本 二百文 昆布三束 百文

太刀キフクリン 谷方礼 三百文 百五十文ヲヒ

田井四郎兵衛礼 二百文 百文ヲヒ 民部百文 岡本百文

御厨帶刀 百文 扇六本代二百文 二百文下路銭

以上 二貫百六十文

一、谷方ニ致逗留事 二月廿七日ヨリ卯月十一日マテ四十三日

上下三人 已上朝夕分 二百六十人 但此内七日高野ニ有之

一、同河州マテ礼銭一貫文 谷方 五百文 吉原方八百五文

誉田殿内衆振舞 酒ソウメン 百文 谷方下人衆へ三百文 小倉殿

已上二貫七百五十文

一、高野 三月六日礼錢 同十一日マテ逗留 入足 三百文 智莊嚴院アツカ同宿百文池辺

二百五十文奉加能代 二百文路錢 送衆有之

已上八百五十文

一、堺江 卯月十一日礼錢 同廿日マテ逗留 入足 三百文 小次郎 三百文四条聖人

二百文ハンタヤ 三百文 宗福 民部同道 二百文 二〇 百文 新三郎

百文 堺江越時路錢 二百文 同堺ヨリ上路錢

已上一貫七百元

合七貫四百六十一文

河州奉加内二貫文已前進之 長享元年壬十一月十六日 聡□(花押)⁽⁴⁶⁾

この文書は、文明十九年(改元して長享元年・一四八七)に東寺が奉加錢を集めるために河内に赴いた時の費用の書出しである(以下「算用状」と呼ぶ)。この時期、義就はまだ健在である。基本的に義就は朝敵とされていたが、寺社権門はそれとは別に莊園の返付交渉や勸進活動を義就と進めていたのである。

「算用状」から、東寺は河内で勸進活動をするため菅田氏及び数名の人物と対面している。この時、菅田以下の人物に礼錢を払い、しかも谷氏の屋敷に四十七日間に亘り逗留していることがわかる。

また、この間に東寺は高野に赴き、また菅田逗留後、堺へも行っている。これは、義就の承認ぬきに南近畿の勸進活動することは困難であったためと見られる。

畠山義就のいる菅田に行き、錢を払わなければ、堺など河内以外の重要な都市での活動が困難であった。この点

について、「算用状」に出てくる人物を見ながら検討していくことにする。

「算用状」から畠山氏の内衆を見ると、「殿」と敬称がついているのは、菅田氏と小倉氏のみで、後は谷・田井四郎兵衛・民部・岡本・御厨帯刀・吉原などの名が上がつている。この記録の頻度から見て、具体的にこれらの勸進活動を支援した中心人物は、菅田と谷氏であった。まず、それぞれについて、その性格を見ておこう。

前述した菅田氏は、畠山氏が山城守護をした際、山城守護代を務めるなど河内の内衆のなかでも、最も畠山氏に重用された家である。菅田氏の一族には政長の内衆を務めるものもいたが、義就系の菅田氏の方が活躍している。義就の官僚組織は、守護代家遊佐氏と「寺門奉行」菅田氏、三奉行人と呼ばれた小柳・花田・豊岡などがいた。⁽⁴⁷⁾ 菅田は、近畿一体の寺院権門との調整をしていたらしく、遊佐氏と並ぶ力を持っていた。

菅田氏は、「算用状」にあるように「内衆」を持つ存在で、「寺門奉行」の立場から「内衆」を調整役に使っていた。例えば、河内国の荘園の返付交渉で、興福寺領山田庄の返付について、窓口となつたのは「菅田之内」の戸屋と田井であった。⁽⁴⁸⁾ 「算用状」にある田井四郎兵衛も菅田の内衆であろう。

つまり、菅田氏は河内を中心に義就の影響を持つ地域の経済活動や荘園の知行などについて、調整を行う役を負っていたのである。また、谷氏については、谷氏は甲斐庄氏と共に常に軍事行動を取る国人であった。⁽⁴⁹⁾ 菅田軍、甲斐庄・谷軍は、義就の軍隊のなかでも精鋭と言えよう。ところが、甲斐庄氏は、文明十一年十一月に義就の屋形で殺されている。これは政長と内通したとの理由であった。谷氏が菅田氏の下で活動するのは、このためであろう。いずれにしても、谷氏も義就の軍事的な構成要素としては、重要な内衆であった。守護所菅田は、これら内衆が居住する都市であったと思われる。

ところで、畠山政長が河内を押さえていたとき、恩智氏が興福寺の紙について、堺から京への流通を保証していたことを示したが、義就期には菅田氏がこれに関わっていたと考えられる。

興福寺大乗院の尋尊は、父一条兼良の京都屋敷造営のために使用する材木を堺から調達しようとした。これについて、「至信貴山寺、被加御下知」ように義就へ依頼している。これに関わったのが、菅田であつた。⁵⁰これらは、何れも堺と奈良及び京都間の流通に関係した問題である。

以上『蕉軒日録』や「算用状」から、畠山義就は堺までその影響下に入れていたことが考えられる。また、この関係は畠山政長が河内支配をしていた時期から基本的に変わっていないことが理解できよう。つまり、政長も義就も堺ルートの物資の流通を保証していること。観心寺が堺・住吉に行くとき政長内衆も同道していたように、堺と河内の守護所は経済的に結びついていること。流通の保証は同時に堺に対する影響力を行使できる権力であつたことが指摘できる。

五、橘島正覚寺

『蕉軒日録』には、堺と菅田の中間に位置する場所として河内国渋川郡正覚寺に関する記事が散見できる。渋川郡のかなり広い地域を橘島と呼んでおり、正覚寺も橘島正覚寺と記述される場合が多いため、橘島正覚寺の名でここでは表記したい。正覚寺は現在の大阪市平野区にあたり、戦国期の都市である平野郷と平野川挟んで接している。正覚寺と平野郷の間を流れる平野川は、河内・攝津両国境界でもある。平野郷は戦国末には、都市であつた。しかし、平野郷に先行する都市として正覚寺を考える必要がある。正覚寺は寺院の名前であるとともに都市の名前であつた可能性がある。正覚寺は明応二年（一四九三）の正覚寺合戦で炎上し、その後には再建されることはなかつた。正覚寺の創建時期、開山・開基など全くわからない。以下、正覚寺の重要性に注目し、三つの側面から正覚寺を検討したい。

まず、正覚寺の宗教的側面を見ておきたい。正覚寺には隣接して安国寺があつた。足利尊氏・直義兄弟が後醍醐

天皇以下戦没者の冥福をいのるために国ごとに一寺一塔が計画され、河内では利生塔は西大寺末の教興寺に置かれ、安国寺は正覚寺の付近に置かれた。⁽⁵¹⁾ 八尾街道の河内国の東と西の端に当たる。また、正覚寺のすぐ東の亀井には畠山氏の菩提寺南禅寺末の真観寺があり、これら正覚寺周辺が畠山氏にとって重要な宗教的な空間であった。

江戸時代はじめに観心寺が河内国中において他寺他山と対座した時の座席に関する記録がある。これによれば、他寺他山と対座したはじめての法会は、「河州 御屋形様於正覚寺法華千部御執行之時」であった。⁽⁵²⁾ 正覚寺は明応二年で消滅することは述べた。このことから、「河州御屋形」とは、畠山基家以前となる。河内国内でこのような法会を行う必要が生じるのは、畠山氏の在国がはじまった義就以降と思われるから、義就・基家の二代の時期であろう。

河内の権門寺社を集めた法会を畠山氏が開くとき、その場所となるのは正覚寺であった。正覚寺は、守護畠山氏の法会体系の中心に位置付けられる寺院でもあったのである。

次に軍事的な側面からみると、正覚寺を有名にした事件が、明応二年（一四九三）に起きる。正覚寺合戦である。將軍足利義材が畠山義就の息子基家を撃つため、管領畠山政長と共に正覚寺に出陣。京都にいた細川政元はクーデターを起こし、新たな將軍を擁立、このため義材は幽閉され、政長は正覚寺で自刃し、正覚寺も炎上した事件である。

畠山義就が菅田屋形に本拠を置いて以来、菅田・高屋責めは、正覚寺に本陣を置き、対陣する場合が多かった。『大乘院寺社雑事記』文明十五年九月十五日条では、河内犬田城・山城水主城で大敗した政長の本拠が正覚寺であった。正覚寺が軍事的に重要であったのは攝河国境にあたり、交通の要衝であったためであろう。奈良街道や八尾街道が通り、西は住吉まで通じる。南北には中高野街道が通じている。また、平野川の船運も利用できる地域であった。このため、河内責めには、まず正覚寺を押さえる必要があったと思われる。

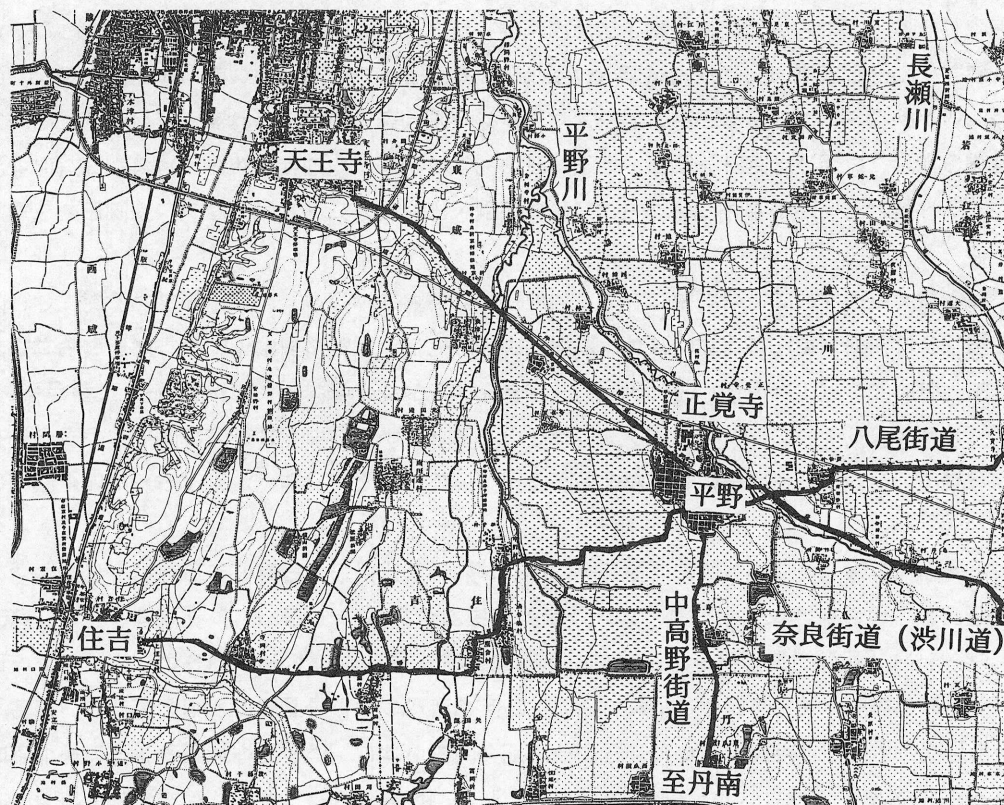


図3 正覚寺周辺地図 (明治22年陸地測量部2万分の1図より縮小)

最後に、日常での正覚寺について『蕉軒日録』からいくつか見ておきたい。『蕉軒日録』文明十六年五月十二日条で、大叔は義就誕生疏を送っているが、この時義就は正覚寺にいたことがわかる。また、文明十六年十二月廿五日条では、大叔自身も正覚寺に赴いている。この時、道で神保与三右衛門尉と会い、橘島安国寺で休んでいる。神保氏は、前述したように住吉を押さえようとするなど、この時期の義就内衆の有力者のひとりである。神保は、越中守護代家のひとつであり、畠山氏内衆の有力な家であった。

『蕉軒日録』に見える神保与三右衛門尉は、この時期正覚寺に「館」があつたようである。つまり、『蕉軒日録』文明十七年三月四日条に海会寺の奉行僧である長薫が神保与三右衛門尉に年賀を怠つたことを謝すために訪れたのは「神三公之館」と表現されているが、この場所は「正覚」であつた。また、文明十七年四月十一日条では、神保与三右衛門尉が歓楽のため、長薫が見舞いにいったのは「正覚」であつた。神保氏が正覚寺に「館」を持つていたことは確実である。

正覚寺は、軍事的に最も重要な地域であり、また、堺・住吉との関係を考えてと経済の要でもあつた。神保氏が正覚寺に「館」を持つていたのは、畠山氏の河内支配を考える上では当然と言える。但し、正覚寺は籠城するような城ではないため、経済的な比重の方が高かつたのではないかと思われる。正覚寺は守護所的な性格を持つ都市であつたのである。

おわりに

河内の守護所と周辺都市について、政長・義就期を中心に論じてきた。本来なら高屋・飯盛城など重要な城郭について論じる必要があるが、すでに紙面も尽きている。地域的にも南河内を中心とした論述に終始してしまった。これは、河内国守護畠山氏の権力が、家臣団編成の問題から見たとき、南河内から展開し、中河内、次に北河内に

向かうという見通しを持つてゐることに関連してゐる。当然、早い時期から北河内にも畠山氏の軍事動員を受ける国人は存在するが、河内十七ヶ所など幕府御領所を抱えた北河内は、面的な展開は十六世紀に入つてからと考えてゐる。これと反対の評価となるのが中河内で、橘島は幕府御領所であつたが、小稿で論じたように義就段階で畠山氏の支配に完全に入つてゐる。北河内の場合、飯盛築城が重要であると考えられる。しかし、そのすぐ北に位置する津田氏などは、結局最後まで畠山氏から自立した存在であつた。

以上の見通しを持つてゐたが、十六世紀の領国支配の問題と都市との関連はまた別の機会に論じたい。

小稿では、畠山氏河内守護就任以来、南河内の国人と河内に接する和泉地域の国人が中心になつて、河内一國を支配する体制を整えてきたことを指摘し、その関係はほぼ河内鑄物師の展開範囲と重なることを述べた。

畠山政長の河内支配段階では、守護所は若江と古市にあることが確認でき、複数の守護所による支配が分国守護体制以前から存在してゐたことがわかつた。

畠山義就の河内下国後、守護所は嘗田に置かれ、守護内衆もそこに集住してゐた。また、正覚寺は、神保氏の「館」があり、守護所のひとつと見られる。堺・住吉は義就の影響下にあり、物資の流通なども義就が保証した。これは河内守護である政長の時代から引き継がれてゐるが、朝敵である義就が事実上この権限を行使してゐることは、河内周辺の勢力が義就と深く関わつてゐたことを示してゐる。

小稿では、和泉守護の問題に立ち入つておらず、このため和泉守護がどの範囲を実質的に統治できたのかなど課題も多い。但し、従来和泉国人の毛穴氏が畠山氏の内衆のように活動する必然性など、従来説明できなかった問題も堺との関連で論じることが可能となつたと思われる。これらの課題も含め、後日に期したい。

注

- (1) 今谷明氏「守護所の性格と機能」(『国史学』一四三号 一九九一年)
- (2) 今谷明氏「室町時代の河内守護」、同氏「河内高屋城の近況と保存問題」、同氏「畿内近国における守護所の分立」(『守護領国支配機構の研究』所収、一九八六年) 同氏「鎌倉・室町幕府と国郡の機構」(『日本の社会史』、このほか、河内国の守護所研究は、森田恭二氏「河内守護畠山氏の研究」第二章「河内若江城の興亡」(一九九三年)、笠井敏光「高屋城と古市」(『ヒストリア』一三三号、一九八六年)、中田佳子氏「戦国の城・河内高屋城」(『大阪の歴史と文化』一九九四年)、同氏「近世史料による河内高屋城の復元」(『ヒストリア』一四六号、一九九五年)、川岡勉氏「高屋城と城下町」(『羽曳野市史』第一巻、一九九七年)
- (3) 矢田俊文氏「戦国期河内国畠山氏の文書発給と銭」(『ヒストリア』一三三号、のち、『日本中世戦国期権力構造の研究』所収、一九九八年)
- (4) 川岡勉氏「戦国動乱期の羽曳野」第二節「畠山家臣団と河内国人層」3「羽曳野地域の国人・土豪層」(『羽曳野市史』一巻、一九九七年)を参照。
- (5) 中田佳子氏註2「戦国の城・河内高屋城」
- (6) 義江彰夫氏「中世前期の国府」(国立歴史民俗博物館「研究報告」八号) 同氏「平安末・鎌倉時代の国府・府中」(『国史学』一四三号、一九九一年) 石井進氏「地方都市としての国府」(『中世都市研究2 古代から中世へ』一九九五年)
- (7) 三浦圭一氏「得宗専制の展開と攝河泉」『大阪府史』第三巻、一九七九年、吉井功兒氏「建武政権期の国司と守護」一九九三年
- (8) 中村博司氏「城郭として利用された攝河泉の古墳について」(『日本城郭体系』12、一九八一年)
- (9) 「和田文書」延元二年三月付岸和田治氏軍忠状案
- (10) 同右
- (11) 「和田文書」延元三年十月付高木遠盛軍忠状案
- (12) 同右
- (13) 『台覧記并諸堂仏体数量記』
- (14) 中田佳子氏註2「戦国の城・河内高屋城」
- (15) 『奈良県大般若経調査報告書』
- (16) 鋤柄俊夫氏「中世村落と地域性の考古学的研究」(一九九九年)
- (17) 網野善彦氏「日本中世の非農業民と天皇」第三部「鑄物師」(一九八四年)
- (18) 川岡勉氏「守護領国下の住民」第二節(『羽曳野市史』第一巻、一九九七年)
- (19) 拙稿「戦国期の河内における国郡支配について」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』創刊号一九八九年)
- (20) 拙稿「戦国期の守護家と守護代家—河内守護畠山氏の支配構造の変化について」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』三号、一九九二年)

- (21) 「和田文書」
- (22) 拙稿「戦国期河内守護と国人・侍」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』六号、一九九五年) 参照。
- (23) 拙稿註20論文
- (24) 『大日本古文書 観心寺文書』 一七九号
- (25) 『大日本古文書 観心寺文書』 一七六号
- (26) 『大日本古文書 観心寺文書』 一七七・一七八・五六八・五六九号
- (27) 今谷明氏註2「室町時代の河内守護」
- (28) 『大乘院寺社雑事記』紙背文書抄(四)(『北の丸』第二八号、一九九六年)
- (29) 鈴木良一『大乘院寺社雑事記 ある門閥貴族の没落の記録』一九四ページに京都駐在の寺家雑掌柚留木重芸についての記述がある。
- (30) 『大乘院寺社雑事記』文明九年十月二日・三日・八日・九日条
- (31) 『大乘院寺社雑事記』文明九年十月八日条
- (32) 「尊意贈僧正伝」
- (33) 『九条家文書』暦応五年(一三四一)正月付撰録渡庄目録
- (34) 福永信雄氏『若江遺跡第38次発掘調査報告』(一九九三年)
- (35) 「長祿記」(『続群書類従』第二十輯上)
- (36) 拙稿「河内国守護畠山氏と一向一揆勢力」(佛教大学総合研究所紀要別冊『宗教と政治』一九九八年)
- (37) 『大乘院寺社雑事記』文明十一年九月十五日・二十一日、閏九月十七日、十月四日条
- (38) 今谷明氏註2論文
- (39) 中田佳子氏註2「戦国の城・河内高屋城」
- (40) 矢田俊文氏「戦国期越後における守護・守護代と都市」(『守護所から戦国城下へ』(一九九四年)
- (41) 拙稿「義就流畠山氏の河内支配」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』八号一九九七年)、川岡勉氏「河内国守護畠山氏における守護代と奉行人」(『愛媛大学教育学部紀要』第II部人文・社会科学第三十巻第一号、一九九八年)
- (42) 泉澄一氏『堺 中世自由都市』(一九八一年)
- (43) 贈答関係が権力論として検証できる方法として、拙稿「天文御日記」にみえる河内守護勢力と本願寺―贈答関係と家格秩序を中心に―(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』五号、一九九四年)
- (44) 「和田文書」(文明九年)十月三日付和田左近将監充細川持久感状、『大乘院寺社雑事記』文明九年九月廿九日条
- (45) 『大乘院寺社雑事記』文明十四年七月十六日条
- (46) 「東寺百合文書」ヲ一一一号
- (47) 今谷明氏註2「室町時代の河内守護」
- (48) 『大乘院寺社雑事記』文明十五年十二月七日条、このほか、菅田の内の者については、『多聞院日記』延徳二年七月条に原・法楽寺・江河・田井を上げる。川岡勉氏

は、註9論文で守護内衆被官人が小守護代・郡代と活躍していることに注目されている。

(49) 谷氏と甲斐庄氏の軍事行動については、『大乘院寺社雑事記』寛正三年五月十六日条、『経覚私要鈔』文正元年九月五日条など

また、甲斐庄氏の殺害は『大乘院寺社雑事記』文明十一年十一月八日条。

(50) 『大乘院寺社雑事記』文明十二年二月十一日条
(51) 『八尾市史』本文編(一九五八年)
(52) 『観心寺文書』七〇〇号「観心寺座配覚書」

